就任の言葉

帰国子女教育のいっそうの充実を求めて

土山　登

国際高等学校は、一九八〇年に設立され、九年目を迎えましたが、今年は、国際高校にとって意義深い年となりました。いうまでもなくそれは、中学校が併設されたことであります。もともと、当初考えられた構想では、中高の併設校の設立でありました。諸般の事情により、高校のみで発足しましたが、以来、中学校を併設することは、私どもにとって悲願でありました。中高一貫教育が可能となれば、よりいっそう創立者新島先生の理想に近づくことができると考えたからであります。それが今年かなえられ、四月から中学生の若々しい声が、学校のなかをかけ抜けております。

このきわめて大事な時期に校長に就任することになり、責任の重さを痛感しております。

創立以来、一貫して定員の三分の二の帰国子女を受け入れてきましたが、元来、帰国子女教育は、新しい教育分野で、手探りの試行錯誤の段階が続きました。それが今でも続いているといってよいでしょう。しかし、その中でも変化がみられるようになりました。初期の段階では、帰国子女教育の研究会などに出席しても、それは、もっぱら適応教育が中心課題でありました。それがここ数年の傾向としては、帰国子女を媒介として、国際理解教育をすすめるほうに視点が移ってきています。帰国子

女のもつさまざまな特性に注目し、校内の一般生徒の国際理解の促進に役立てていこうとするものです。このことは、なにがなんでも帰国子女を、国内の教育体制に押し込めようとすることからは一歩前進といえるでしょう。

また、一方では帰国子女自体も、いろいろな点で、変化してきているように思われます。例えば、国際高校の帰国子女の入試では、外国語の論文による受験も認めておりますが、最近では、タイ語やインドネシア語で受験をするものがでてきており、これは東南アジアにおいても、その国の文化に深く接する帰国子女が増えていることを物語っております。また、現地の人と結婚し、混血の子女が入学してくる例も漸増しております。海外の滞在年数も長期化の傾向があり、日本人の海外の活動のあり方に変化がみられ、帰国子女の層にもその変化が現れていることになります。

さらに、日本から海外に進出する学校も増えてきております。この傾向は今後とも増加するものと思われます。日本人学校を、現地の子女にも開放すべきであるとの提言がなされている一方、塾の海外進出も激しさを増し、国内でみられるような偏差値の輪ぎりが海外にまで輸出されてきています。これはせっかくの海外の文化に触れる機会を奪うもので残念なことであります。

このように変化の激しい時代でありますが、日本の国際化は増しこそすれ減じることはないと確信しておりますから、新島先生のことばであります「良心を手腕に運用する」国際人の育成は、まことに意義深いものと思っております。困難の多い道ではありますが、教職員ともども一歩一歩前進していきたい所存であります。みなさまがたのご支援もよろしくお願いいたしたいと思います。

（国際中学高等学校長）